

最近はすべてのものが値上がりしているので特別のことではないと思うが、「令和のコメ騒動」が今年一番のニュースになっているように思う。コメが足りないから価格が上昇するのは、市場経済の原理原則であるが、本当にコメは足りないのであろうか？最近の日本では各家庭での「米離れ」「米離れ」とずっと言われてきたのと思う。

一番記憶に新しいのはコロナ禍の時に、マスクが足りないと言って一部の人達が買いあさり転売したりしていた。我々の周りでも値が上がる可能性があるから、足りなくなる可能性があるからという不安感でスーパー、ドラッグストア、ホームセンターのマスクを一般庶民が買いあさり、結局品切れになっていた。さらに良くわからないのが、コロナの時にトイレットペーパーまでもが買い占めに会い棚から消えていた。各家庭を見てきたわけではないが、本来予備をそれほど置かないのに何か月分ものトイレットペーパーが押し入れに隠されていたと推測する。お米に関してもきっと各家庭の台所の流しの下に米袋が隠れているのではないかと推測する。

「相場」というもので商いを行っている人達もいるから一般庶民だけが振り回されているのではなく、「黒幕」といわれる大きな組織がきっとあると思っている。農林水産省の小泉大臣も派手に動き出したが、やはり「令和のコメ騒動」で莫大な利益を上げている人がどこかにいると私は推測している。

さて、「コメ」に関して最近感じたことを書きます。昭和世代の皆さんならわかってくれると思いますが。我が家は自宅で稲作はしていなかったのも、お米は飯田市白山町にあった米穀店に買いに行っていた。時には、母親の実家からお米をもらうことがあり 30 kgの米袋を子供ながらに運んだ記憶がある。昔はブランド米などなかったから、普通のコメを普通に炊いて食べていたし、我が家は4人家族であったが父親と男の子3人であったので朝1升5合を炊いても昼まででなくなるため、夜もさらに1升炊いていた。今だから言えるが、高校生の時は、1時間の昼休みに家にバイクで戻り家で昼ご飯を食べていた。その話は別として、ご飯を食べていると時々、「ジャリ」「ジャリ」と音がして出してみると小さな砂(石)がでてきた。その後は何となく砂がまだあるのではないかと恐る恐る食べていたが、当時はそれが当たり前と感じていた。いつの日かそういうことがなくなり、お米もきれいなビニール袋包装でスーパーに売られるようになっていた。

話は変わるが、2010年と2011年にアフリカウガンダの奥地カロンゴという村(アフリカ大陸の真ん中)の病院で勤務した時は、病院敷地内の官舎に住んでおり、現地のメイドさんが食事、洗濯、掃除などの一部を手伝ってくれていた。食費を渡し、お米や野菜などを買い置きしてくれたので自分で料理をしていた。ウガンダで

ご飯を炊くと、「ジャリ」が結構な頻度であるため、お米をかす(コメを研ぐの方言らしい)前に机の上にコメを広げて一粒一粒ずつ砂を選び分けた後にお米を炊いていた。ちなみにウガンダ(ケニアもほぼ一緒)のお米は、おいしくはないが日本のお米に似た感じのものでした。今回のコメ騒動で、懐かしい昔のことを思い出しました。

さらに余談ですが、ウガンダでは官舎の周りに広い庭があったので数羽の鶏が飼われていました。朝になると雄鶏がにぎやかに鳴くので、目覚まし時計になっていました。今回の絵はその鶏たちの絵ですが、当然のごとくその鶏たちはメイドさんによって絞められ、我々の食卓に上っていたのです(当然僕の胃袋にも入っていました)。昔の日本の田舎でも普通の風景でしたが、今やスーパーマーケットできれいに包装された鶏肉をありがたみも感じず食べているのですね。

ウガンダの鶏

